

(令和元年八月二十九日)

万葉の髪飾りに似し馬酔木咲く自生している宰府の道に (中村 まさ子)

大鳥居ひらりと躲しつばくらめ天満宮の空を突つ切る (白井 道義)

五月晴令和元年人の文字政庁跡の記念の歴史 (田中 茂樹)

深緑の新婚の旅新家族我が子に宿れ古の知恵 (中川 公二)

乙女らの笑ひ声する工房に梅ヶ枝餅生る花のごとき掌 (小山 純子)

こくうすく緑ゆたかにそめあげてみずきの里は夏さかりなり (矢野 早苗)

梅の木に花こそ無けれ咲く笑顔太宰府みくじ大吉男 (中川 未樹)

新緑に朱色鮮やか太鼓橋木の間からさす春光令和 (根間 綾乃)

水面にも風の道あり菖蒲苑めぐる出会ひや池中の句碑に (横山 美恵子)

あじさいと少女の声に華やぐ橋青梅のかおり風にとけこむ (妻嶋 美香里)

梅ヶ枝のもちをほおぼる君のほほ。ピンクにそまり梅咲きほこる (小武 宏太郎)

山頂は雲にかくれし宝満山登りし過ぎ日思い眺むる (関本 美津代)

改元てふ令和の里はいづこにと政庁跡に人の溢れる (土師 累徳)

小・中学生の部

参道のにぎやかさとほうらはらに大樹がかたる時の静けさ (森田 華帆)

京都より旅にてここにきたわれに令和の流れをひほひけるかな (なかやま しゅんすけ)

太宰府はとつてもとつても良い所しかしトイレが少し少ない (平井 心)